

本の万華鏡

日本の不平等

大竹文雄著

日本経済新聞社 二〇〇五年

推薦者
豊田 尚吾 (とよた なおご)
 大阪ガス エネルギー・文化研究所 主席研究員

社会の格差や不平等に対する関心が高まっている。大阪ガス エネルギー・文化研究所の生活意識調査でも、いくつかの質問を、勝ち組・負け組み論や、社会の格差拡大に対する意識の調査に当てた。

しかし、不平等という言葉は、各人の持つイメージが多様で、同じことを論じているつもりでも、論点が異なる。と、とんちんかんなやりとりになってしまう。結果として建設的な議論が行いにくい。曖昧さを避けようとする、まず、「不平等とは」とする。「と」という定義づけを行い、話を進めていく必要がある。それでも、不平等の「尺度」の算出ともなれば、利用可能な統計に頼らざるを得ず、本当に知りたい不平等とは似て非なる数字をいじくって話をしなければならぬ。

もちろん、どんな言葉でも、多かれ少なかれ今述べたような問題を孕んでいるのだが、不平等論は特にそれが深刻なわけではないか。それは不平等というテーマが、人間の尊厳に関わるような問題で「定義づけ」に関する納得性が得にくいからだ。例えば、筆者で言えば、所得分布の変化という事実よりは、その評価に目が向いてしまう。その場合、自分や他者の社会における位置づけに対する納得感の有無、あるいは各人が、所得の多寡に関係なく、他者を尊敬し、社会を支えている存在としての他者に感謝しているかどうかなどの「意識」が大きな関心事となる。

『日本の不平等』は、日本の不平等化や格差拡大に関する、興味深く、しかりとした考察を行っている。しかしどこかで隔靴搔痒の感を持つ。それは著者の不平等や格差というものの定義づけが筆者の問題意識とずれているからに違いない。この書は、経済学者による経済学の論文集であり、論理の厳密性が徹底されている。今までに無い挑戦的研究もあるが、研究者の使命として、「学」の領域を逸脱してはいない。不平等に関する問題意識が著者と読者との間に重なるような人ならば、今述べたようなもどかしさは感じないのであろう。しかし、不平等論は、様々な問題意識を包み込むような大きなテーマである。したがってこの書だけで日本の不平等を理解したと満足した人は多くはあまい。それはそれでよいのであって、本書のような議論を知ることであらためて、「自分にとっての不平等論とは何か」を、より深く考えることができるのである。



from editor's room

CEL編集部が推薦する参考図書

- 『高齢時代を住まう 2025年の住まいへの提言』園田眞理子他 建築資料研究社 (1994年)
- 『消費者理解のための心理学』杉本徹雄編 福村出版 (1997年)
- 『カメレオン人間の性格 セルフ・モニタリングの心理学』M.スナイダー 斎藤勇監訳 川島書店 (1998年)
- 『自己と感情 文化心理学による問いかけ』北山忍 共立出版 (1998年)
- 『売れ筋の法則 ライフスタイル戦略の再構築』鮑戸弘 ちくま新書 (1999年)
- 『生活者の経済』御船美智子 放送大学教育振興会 (2000年)
- 『現代生活者試論 類型化と展開』片山又一郎 白桃書房 (2000年)
- 『新・生活者からみた経済学』萩原清子 文眞堂 (2001年)
- 『ビューティフルライフ 消費の次の暮らし方』相根昭典、上遠恵子

- 海拓舎 (2001年)
- 『現代社会の生活経営』御船美智子他 光生館 (2001年)
- 『生活経済論』馬場紀子他 有斐閣 (2002年)
- 『豊かさの条件』暉峻淑子 岩波書店 (2003年)
- 『愛したくなる「家族と暮らし」』天野正子他 PHPエディターズ・グループ (2003年)
- 『安心して好きな仕事ができますか 働き方の多様性とセーフティネット』橋木俊詔+橋木研究室編 東洋経済新報社 (2003年)
- 『21世紀家族へ 家族の戦後体制の見かた・超えかた』落合恵美子 有斐閣 (2004年)
- 『希望格差社会 「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』山田昌弘 筑摩書房 (2004年)
- 『生活リスクと環境知 ライフスタイルを変革するために』谷村賢治 昭和田 (2004年)
- 『家族のライフスタイルを問う』神原文子 勁草書房 (2004年)